No.6
新春号

芥川だより

編集発行人　下村嘉明
発行所　着物から服を仕立てます　梵
高槻市芥川町2－14－3
℡ 072－681－8870

発行日/2006年12月20日
ご希望の方にはお送りします
お気軽にお問い合わせ下さい。
e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

芥川の写真屋さん

新年明けましておめでとうございます

本年も旧年同様芥川商店街をご愛顧ご支援いただきますようお願い申し上げます

商店街組合員一同皆様に愛される商店街を目指し今年も頑張ってまいります

何卒、よろしくお願い申し上げます

平成19年　元旦

芥川商店街事業協同組合
理事長　山川　寛

謹賀新年

芥川商店街理事長　山川　寛
まごころサービスの店　**ダイコク電化**

芥川商店街専務理事　児島　秀樹
写真撮影　コジマスタジオ
★　成人式のお写真は是非当スタジオへ　★

芥川商店街理事　川越　誠
学生服のいがや

芥川商店街理事　佐々木　晶
谷川金物㈱

芥川商店街理事　下村　嘉明
着物から服を仕立てます　**梵**

芥川商店街副理事長　神鳥　一雄
ヘアーサロン　カミトリ

芥川商店街理事　高野　吉功
創業８０年　**マスタークリーニング技術者の店**
テクニカル　クリーニング　**白高社**

芥川商店街理事　池田　清
オシャレな洋服屋　**ムッシュ・キヨシ**

芥川商店街理事　浦　富一
浦昆布本店
＊＊ふっくら・やわらか・よろ昆布＊＊

芥川商店街理事　谷井　靖
保険の身近な相談所　**総合保険事務所**

「芥川だより」が生まれて半年になろうとしています。企画ものも含む新しいスタイルになりたいと念じつつ。

年支、亥の今年、足元固めて着実によい年でありますように。

そして、このむずかしい世相と共にいろんな思いをこめられた、みなさんとの交流の場という、初期の性格は、変わってません。

忙しい毎日も、持ち前のエネルギーで乗り切り、暖かい、おだやかな日差しが急に変わったとしても、むずかしい局面も切り抜けていけると願いつつ。

頼りにしてまっせー、たのしみでっせー。

二００七年をむかえて、「芥川だより」名に恥じないよう、一層の飛躍を夢みてます。

今年もどうぞよろしく

中味（なかみ）

かごの鳥でも　ちえある鳥は
人目しのんで　会いにくる

年代がわかるだろう、この唄を耳にすれば、フッと若かりし頃に思いが走ってゆく。親の目が光っている。会いたい、でも出られない、男ばっさい、こんな言葉は、今は通じない。すべてが、ばっさい人で、うずを巻いているもの、男、女を問わず。

でも楽しかったなあ、スリルがあったもの。ドッコイサ、ドッコイサと盆踊りのおはやしが聞こえてくる。何にも目に入らない。ゆかた、帯も男結びになっていても、まず踊りの輪の中に入ってしまえば、こっちのもの、夜明けまで踊るんだから。

音頭がとまる、太鼓も止む。踊っていた人は、それどれの家路へ、どんな空気が待っているのだろうか。その表情は満足し切っている。また明日も踊ろう。サイナラー、下駄でなし草履をはこう。約束までして別れていく。みんな元気、ソォーッと家の中をのぞく、瀬戸でアグラをかいて睨んでいる。こっちから入ろうと、カギがかかっていて入れない。

女のくせに恥ずかしいと思わんか、今にも手が振りかかってくるような、どえらい剣幕。明日はどつかれる。やめとこうと腹をきめた、おっとドッコイ、そうは問屋がおろさない。誘惑の声、裏口から出てこい自転車で待っているから。

いこう、踊ってこう、女は踊ったらあかんのか、男ばかりの踊りなんて、見る人もないワ、くそ親父、反抗的な娘を持った親は泣かされただろう。私は、現代の世相を批判する気持ちは毛頭なし。あしからず

中味は老いても朽ちず
高槻音頭に魅せられて
芥川よいとこ一度はおいで
一度といわず
二度　三度

詩　よろこび

料理がうまかったなあ
和裁が上手で
教えてもらったんだ
歌がうまくて
田植うたなんか
抜群だったそうな
これは信じられない
しとやかで
なんていったんだろう
自分の好きな料理ばかり
そのくせ
たいしたことないよ
雑巾さえも　縫いやしない
洋裁習うと　月謝払ったら
すぐやめた
手に物を持ってる時は
戸を足でける
僕が何かをやってる時に
平気でテレビの音をあげて
大声で笑ってたんだ

これでは　バアちゃんの
品位がさがる
若い時は　とっても上品で
とっても　やさしい人だった
と言ってもらえるように
今からでは　もうおそい
やりなおそうかな
若い日に呼び戻してくれる
生きて居るという証しを
見つけて
老いをかみしめる毎日

連載小説◆負けるな！よっちゃん ②

猛吹雪の夜

梵店主

あらすじ

大学に入学したよっちゃんは、山岳部に入り、初めての合宿に参加した。冬の剣岳・早月尾根の最初の夜に作った御飯が石油臭い。「さあどうする」

何んとも言えない暗い空気が流れ、とても長く感じられる時間であった。

皆が臭いと言い出してから、よっちゃんは、何が起きたのか判らなかった。自分が少し食べてみて、はじめて事の重大性に気づいた。疲れた身体がいっきに覚醒したように硬直した。どんな事が次に起こるのか不安が頭をよぎった時、元リーダーの四年生が「食べよう」と言って食べ始めた。

余分の食料は少ない。少ない食べ物をほかす訳にはいかないのだ。仕方がないからみんなも食べた。幸い誰も腹痛をおこすものはいなかった。

食べ終わると、自分の食器をお茶で洗ってポンペ（トイレット・ペイパー）で拭き、よっちゃんのもとに返してくる。彼はそれらをまとめて片付け、炊事用具を整理する。先輩はたばこを吸ったり、横になってくつろいでいる。

外は暗くなり、吹雪はさらにきつくなってきた。よっちゃんの仕事はまだ続く。外に出るためにテントの狭いなかでヤッケ、オバーズボンなどを着る。完全装備で猛吹雪の外に出た。尾根筋にテントを張っているので、谷から雪をともなって凄い風が吹きあげてくる。テントの中からリーダーが外の様子を訊いてくる。「天気はどうだ、雪の積もり具合は、テントの張り綱を点検して、まわりを除雪してから入って来い」。「はい、わかりました」と返事をする。

初めにコンロに石油を足すが、吹雪の中、雪が入らないようにするのが難しい。マイナス十度を超える吹雪の夜、ヘッドランプで作業するのは大変だ。テントのまわりを除雪しても、吹きあげてくる雪ですぐ埋まるのである。「テントを傷つけるな」と先輩が中から怒鳴る。悪戦苦闘をして一時間、「もう入って来い」と声がした。急いでヤッケに付いた雪を払い、入り口の紐を緩めて中に入る。テント内に雪が入らないように素早くやらなければならない。入ると、ご苦労さんといわれるかと思いきや、「雪がまだついとる」と怒られる。

やっと寝られるかと寝袋を取り出し横になると、先輩が「ポン（トイレ）に出る」という。場所を空けなければいけないので、起きて片隅に寄る。みなの用がすみ、入り口を閉めると、先輩が「おい、飲むか」と、ウイスキーの入ったコップを差し出した。一気に飲み寝袋に入る。小さなテントなので、六人互い違いに寝る。それでも窮屈このうえない。

くたくたに疲れているはずなのに、寝つきが悪い。雪でテントが潰されたとき破って脱出できるようにナイフを首から下げ、ライトを寝袋の中にいれ明日起きる時間をチェックする。朝四時のエッセンだから三時半起きである。早く起きすぎても怒られる。素早くしなければと、頭の中で手順を確認する。

寝袋の中でよっちゃんは、今日バテて歩けなくなったことを考え、どうしたらバテずにすむかと考えた。パーティの誰か一人がバテれば、他のものはバテない。このパーティでバテそうな人はいない。しかし、明日もよっちゃんがバテれば大変な苦痛を味わうことになる。

何か救いの方法はないかと考えていると「おい、外の除雪してこい」と声がした。寝袋から出て完全装備に整えると、「風が強そうだ、ザイルを付けて行け」と指示され、ザイルの端を身体に結び、二年生に確保してもらって外に出る。真っ暗の中、ヘッドライトに照らし出された吹雪の様相は凄まじい。スコップはテントを破る危険があるので、オーバー手袋を付けた手で雪を除ける。いくら除けても、風で舞い上げられた雪が積もるのである。

しばらくしてから、テントに入る。身体は凍えるように冷えているので、寝袋に入っても寒い。時計を見ると十二時、早く寝ないと明日またバテることになる。寝坊したら怒られる。目覚まし時計もないから「気合」で起きるしかない。寝なければいけない気持ちと、寝坊してはいけない恐れとで、よっちゃんはなかなか寝つけない。

《山猿の介護日誌》①

笑顔が消えた日

新聞配達のバイクのエンジン音で目が覚めた。時計の針は四時半をさしている。温度計は十度を示している。この時間に目が覚めると、なかなか眠れない。起きてしまおうと思っても、寒さでベッドから抜けだすのがおっくうだ。おそらく霜がおいているだろう、空は晴れあがっているはずだ、そんな外の景色を思い浮かべていると、僕が起きた気配を感じたのか、隣のベッドで寝ていたお袋が小さなうなり声を上げた。その声に促されるように、僕は起き上がって石油ストーブとガスストーブに火をつけた。

お袋の冷たい頬を掌でつつみ、額を寄せて「かあちゃん、おはよう。きょうは寒いぜ」と声をかける。聞こえていることは間違いないが、目を開けたままで反応はない。自分のベッドを折りたたみ、壁に寄せる。二〇分ほどで部屋が暖まったので、ガスストーブを消す。お袋の体位を変え、ついでにオムツをみる。大量の尿がしみこんでいる。二回の排尿があったということだ。一時過ぎに見たとき、排尿はなかった。それから二度したということだ。昼間より夜のほうが排尿が多い。朝まだしきころから介護の一日が始まる。

お袋は自分で体を動かすことはできない。四つ、五つの枕を使っていろいろな体位をつくったり、寝返りをうたせなければならない。まったく動かせないというわけではない。眠りから覚めたとき、背伸びをするように少しだけ両手足をみずから伸ばす。言葉を発することもない。ただ一度、車いすに乗せるとき、腰をまげすぎて、泣き出しそうな顔をしながら「いたい」という言葉を絞りだすようにいった。それだけだ。そんな植物状態になったのは三年前の初夏である。

おやじが、肺炎で二週間ほど入院したのを機に寝たきりになった。その介護をお袋がしていた。わがままで暴力的なおやじを介護するのにたいへん苦労したようだ。俺はそんなおやじと、子どものころから衝突ばかりしていた。寝たきりになって何ごともままならず、ますます粗暴になったおやじにたいし、お袋は電話口でよく愚痴をこぼしていた。京都にいる僕に何度もそんな電話があった。そのうちにそんな愚痴を聞くのがたまらなくいやになり、ついつい声を荒げて電話を切ってしまった。それがお袋との最後の会話である。

それから十日ほど立って、お袋が倒れた。

介護疲れであろう、おやじがいる寝室前の廊下で倒れ、頭を打って脳内の血管が切れた。発見が遅れたために出血が脳を圧迫し、脳幹部に損傷を与えてしまったのである。倒れたお袋におやじは気づいていない。発見したのは仕事から帰った姉だ。救急車で運ばれた脳外科病院で緊急手術を受け、それから三カ月あまりさまざまな治療を施してもらったが、回復することはなかった。お袋が倒れて二カ月後、おやじは逝った。

病院での治療を終えて、お袋は自宅で介護することになった。施設のショートステイや入浴、ヘルパーなどのサービスを受けながら、おもに自宅介護である。当初は同居している姉が、仕事をしながら面倒を見ていた。ところが、半年ほど経って姉は腰を痛めてしまい、そのうえに八キロの体重減である。もはや限界と思い、僕が全面的にお袋の介護をすることに決めた。

ときどきお袋の友人や親戚のものがたずねてくる。そんなとき、その人の顔を目で追いながら、満面の笑みをこぼすことがあった。ときには泣き顔にもなった。そのときははっきりと見えているようだった。だれがたずねてきたのか、自分はどういう状態に置かれているのか、ということをちゃんと理解しているように思えた。しかし、まったく反応しないこともある。むしろ反応しないときほうが多い。どうも午前中がよく反応したようだ。そんな反応が次第に少なくなっていく。

僕が介護をはじめてから一年ほど経った秋、ショートステイを終えて自宅に帰ってきたときである。車いすにすわったお袋が僕の顔をじっと見すえてから、にっこり笑った。それ以後、笑顔を見せたことはない。最後の笑顔はかわいらしかった。

笑顔は消えたが、体はいたって健康なのである。今年、八十になった。まだまだ長生きしそうである。最後まで手を抜かず面倒を見ようと心に決めている。

江戸っ子　エンちゃんの独り言

いのちとは不思議なものである。私の命は一九二三年一月三日（亥年）に、この世に生をいただいた。大正の終わり、旧江戸壊滅期に産声をあげたのであるが、お正月が来ると三日の日は必ず、私の出産時の父の苦労話が、ご馳走のように出る。

お正月で、どこも皆お休みで、かかりつけのお産婆が留守で、そうざらに産院があるわけでもなく、お産のことを知らない主が、産気づいた嫁に「あなた早くお産婆さんをつれて来て下さい」と頼まれても、どうなるものでなし、いつもおなかをさわってくれていた人がいなくてはどうにもならず、さしむかいでくらしていたときは気楽でよかったけど、二番目の私生まれる時は、お正月で、どこもお休みで、一つ違いで酉年生まれの姉がいたので、その子は泣くし、嫁はお腹が痛いので何とかしてとベソをかいてくれるのであんな困ったことは無かった」と言った。お産婆さんが帰って来るのを待って出産したのだと出産時の苦労話がお正月からの話。

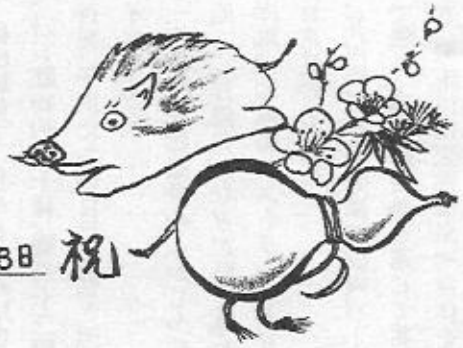
そして、その年の九月一日は関東大震災、私の実家は東京の港区で、宮城[illegible]。地震の年は七月から非常に暑く当日は殊のほか暑かったそうである。丁度昼時、十一時五十八分、ぐらっと揺れて一寸地面が引っ込んだ気がして、昼ごはんの仕度でオヒツが横にあったので大急ぎでオヒツを抱えて、外へ飛び出したそうである。ハッとオヒツを見て子供はと大急ぎで家に入りタンスの横に寝ていた赤ん坊の私を抱きかかえ、又外に飛出して、後ろを振り返ってみたら家はすでに倒れ、あっと言う間にあちらこちらのつぶれた家から煙が上がり出し、抱いていた私を背中にくくりつけ、一歳上の姉の手を引いて近くの広場に逃げたものの地面が揺れてどうにもならない。

地面の軟らかい所は、地面が割れ、その中へ人が落ちて、又揺れた拍子に土地が元に戻り、その中に落ちた人はそこから動くことが出来なくて足を切ってくれとか、身体を引っ張り出してくれと、揺れる大地のあちこちで悲惨な悲鳴が聞こえたという。あの関東大震災は何んとも言えず凄まじく、その中で一月に生まれた子と二歳の子を連れて行く当ては無く、どこも彼処も木造建築の江戸の町は、すぐ煙が上がって火の海で、どうにか取り出された荷物を車に載せて江戸城横の桜川町から、母の実家の工場へ逃げる事が出来て、生まれて九ヶ月目の私の第一の受難をどうにか逃げ遂せる事が出来た。

大正時代は地震で壊されたものはドンドンと復旧されて地震の町もすばやく復興して、道路も広げられた。私の実家は木材をあつかっていた関係上資材が早く手に入り、家は元の家と同様、日比谷公園の近くに復旧して建てられた。私が五才の初夏の頃公園へ遊びに行く為に、虎の門の通りを姉と二人して車道を横切らうとした時に、当時滅多に通らぬ高級自動車が横から走り出て、幼い子供に突進して来た様に思う。その途端、手を引いていた姉は私の手を放って向かい側の道路へ駆け込み、残された幼い私は、どうしたらよいのか身体がすくんで動けなくなった。そこにに自動車がぶつかって来て、瞬間のブレーキの音が、その後何時までも耳に残っている。足を引かれた私は動きが取れなくて、急ブレーキの音と共に飛び出して来てくれた運転士さんの姿、その後は分からずで、幼い頃の車への恐怖心はそのブレーキの音がいつまでも耳の底に残っている。八十三歳の耳の奥に残る程怖かった体験でした。

子供の頃の怪我は痕を残すだけで、どうにか治ったが、それから又三年後に新築する二階の座敷の窓から後向けに、逆とんぼりに地面に叩きつけられという事故に遭いました。二階から逆さに落ちる私を離れて見ていた父が、飛び上がるほど驚いて走ってきてくれた時は、ああ怖かったと、すっと立ち上った私を見て「どうだ、怪我はなかったか？」と心配していた父に、にっこり笑って「どこもなんともないわ」と笑った私を抱きしめてくれた父の力強い腕を思い出すのである。それが私の死と生の瞬間であった。幼い頃に生と死との狭間を通った私は、今八十四歳になるが、それまでの過ぎし日の思い出は、他の人が体験した事のない事ばかりではないかと思う。

（江戸っ子、エンちゃんのひとりごとでした、聞いて頂戴）



何かに心が釣られるとき

梵店主

たいへん競馬の好きなK君がいた。彼は一日中、競馬の予想をメモ帳に「ああでもない」「こうでもないと」ブツブツ言いながら書いては消し、消しては書き、競馬の予想をすることに熱中していた。十年以上毎日、仕事は横に置いて、朝から晩まで競馬の予想に耽っているのである。これだけ熱心にやっているのだから予想が当たるかと思いきや、なかなか当たらない。

人の心は、ある日突然釣り上げられる。予期せぬ出会いによって、神の垂らした糸で釣られるかにように心を奪われる。いつ、どこで、何に、どのように心を奪われるかは誰にもわからない。競馬に惚けているK君を見て馬鹿にする自分もまた、何かに惚けてる。

K君は、あらゆるデータを数式にして予想をする。しかし、思う成果が得られない。たまに当たると大騒ぎをして喜ぶ。口角アワを飛ばして「な、俺が考えてた通りやろ」「しもさん、珈琲おごるわ」と気前良くなる。彼の夢は、競馬で大儲けして家を立て、商売を始めることであった。その夢を実現するために勝利の方程式を見つけなければならない。

彼は、学生時代にわけもわからずに買った馬券が大当たりしてアルバイト代の三カ月分ほどの金をつかんだ。そのとき心も釣られたのだろう。私の心も金という餌に釣られてしまって久しい。

投稿

「川柳」

真本　嘉代子

○ 旧年はドボンとはまり六ヶ月
○ 同好会絆強める刺し子糸
○ はしたない・もったいないの戦中派
○ マスクイズ難問解いて魔女となり
○ 新年も古代ギレ着て梵参り

高槻ふんか辞典③

芥川と摂津峡

横山　高治

「芥川」は、ふるさと高槻を代表する清流である。

市民が朝な夕なに仰ぐ北摂連山の山奥に水源を発し、ひなびた原の盆地、緑滴る摂津峡をゆるやかに流れて北摂平野に入り、芥川桜堤へ。

庄所付近から天井川となり、番田と唐崎の間で淀川に注ぎ、水源から河口まで約二五・六キロ、意外にも大きい川である。

支流は出灰川・萩谷川・田能川・女瀬川、流域は黄金の波打つ沃野や住民団地、町や村が広がり、秘境の田能や樫田の里、三好山の芥川城跡・本山寺・神峯山寺・安岡寺・摂津峡など名所古跡も多い。

神峯山寺は天台宗の名刹。京都の鞍馬、大和の信貴と共に「日本最初出現毘沙門」の山と知られ、寺は桓武天皇の兄、開成皇子が七堂伽藍と二十一坊を建立した仏教の聖地。

三好山は戦国に芥川三河守が築城、能勢頼則が連歌興行をし、三好筑前守長慶が芥川城で「芥川政権」を樹立、摂津など十一か国統治した古城。

そして摂津峡は東の三好山（城山）と西の中堂山の間をよぎる渓谷で、岩をかむ清流と緑滴る渓谷美は大阪府の名勝「摂津耶馬渓」の名に恥じない。

春は桜、秋は紅葉…。しかも付近は自然の宝庫で、岩石鉱物約二十種、野鳥十三種、昆虫は数百種。子供たちの自然観察と憩いのパラダイスである。

しかも一帯には天然温泉の「かじか荘」と「山水館」、「祥風苑」などが軒を連ね、しゃれた洋風、和風のレストランもあり、桜公園はお花見の名所だ。

ただし、芥川桜堤や桜公園で焼肉パーティーだけで無く、市民は四季を通じて芥川べりを歩き、週末には天然温泉で身体を休め、戦国ロマンにもひたって頂きたいものである。

（天神町、歴史作家・近著は「北摂歴史散歩」（創元社）と「蒲生氏郷と家臣団」（歴研）など）

編集後記

目標の四分の一である6号であります。山登りで考えますと、これからがおもしろくなっていく訳でありますが。

この「芥川だより」は如何なりますことやら、お楽しみに。猪の年ですから、突き進みたい。

どうか、次号もご支援よろしくお願いします。

魚あれこれ

〈ホウボウ〉

周防　春日丸

変わった魚がたくさんいるなかで、このホウボウという魚は体長が四〇センチほど、体色が赤褐色、骨が太くて四角張って、いかつい顔つき、目が大きい。しかし何といっても最大の特徴は扇形の胸鰭にある。普段は折りたたまれている胸鰭を広げると、緑色（エメラルドグリーンと青の色）が、体の赤と鮮やかなコントラストが美しく印象的である。この胸鰭を羽のように広げて水中を滑降。泳ぐこと自体はそれほど得意ではないが、海底を這いまわり移動する。その名前の由来は「這う魚」ということからきたらしい（九州ではホコノウオと呼び、ホコとは「這う子」という意味でもある）。

ホウボウは胸鰭の下に左右三本ずつの「足」を持つ。これは胸鰭の軟条が変化したもので、この六本の足で海底の砂の上を昆虫のように歩きまわる。地方によっては、目や胸鰭が大きくて海底を歩く様子がキリギリスに似ていることからギスとも呼ぶ。この足は触手の役を兼ねており、餌を探すのである。こうした一風変わった姿のみならず、ホウボウは鳴き声を出す魚としても有名なのである。

ホウボウの鰾（うきぶくろ）は二つの部屋に分かれて穴があいている。その穴を空気が往復する時の振動で音を発するわけで、出す音は「ボーボー」「ホオブオッ」、ヒキガエルの様な「グワッグワッ」に似ているとか、ゴム風船を膨らませて、その表面を親指と人さし指でこすった時の音に似ているとか…、いろいろである。この鳴き声がボウボウと響き渡るところから、ホウボウという名前になったという説もあるほどである。私には「グクウーグクウー」と聞こえるのですが……。

他に同じようにして鳴く魚にイシモチ、ニベなどがいる。ニベ科魚類の別名の「グチ」は産卵期に鰾を振動させ、「グーグー」と鳴く様が愚痴を言っているかのように聞こえるために付いたものである。この呼名には納得、まさにそう聞こえるから不思議である。

ホウボウは鯛と同様に目出度い魚とされ祝い事に使われたり、「頭の骨が硬くなるように」とか「夜泣きを封じる」との願いをこめて、昔から赤ん坊の食べ始め「箸初め」に用いられている。

ホウボウは秋から冬が旬。骨が太いので食べられるのは全体の四〇パーセント位で、他の魚と比べて身だまりが悪いが、肉質は白身でタンパク質を多く含むのが特徴。鱗が細かいので丁寧に取りましょう。鮮度のよい大ぶりなものはお刺身に、皮にゼラチン質が多いためじっくり煮込むと美味しい煮こごりができる。淡白な味を生かして塩焼きやうす味の煮付け、椀だねに。またよい味が出るので、鱗や鰭を落としたものをぶつ切りにしてチリ鍋にしたり、ブイヤベースの材料などに。変り種としては「鳴き袋」といわれる鰾を湯引きに。肝、心臓もいい味である。

読者からのたより

師走に入り急に寒くなって来ました。お忙しい中、芥川だよりを届けて頂きまして、有難うございました。私も勉強しなければと…、取り急ぎお礼まで。

茨木市　Tさん

あわただしい師走になりましたね。芥川だよりありがとう。読みながらYさんの、お若い頃の姿を目にうかべています。

長岡京市　Kさん

芥川だより毎月楽しく読んでいます、5号は、私には少しむずかしかったけど…。もうすぐ正月ね、何時の間にやら高齢者と言われるようになって、もういやあーですね。それでは良いお年を！

大阪市　Aさん

「芥川だより」からの新年の催しのご案内

ご愛読者の方に、「新春。初雑煮振る舞い」を元旦に行います。田舎の和知から、餅、白味噌を取り寄せ、白味噌の雑煮を無料で皆さんに食べて頂きます。お神酒も少し用意致します。

日時／元旦、一〇時から（100人分用意しますが、なくなり次第終了）

場所／芥川商店街・梵

ニューヨークの大晦日

梵店主

二十年あまり前にアメリカのニューヨークの繁華街、タイムズ・スクエアで見た大晦日の光景を思い出す。

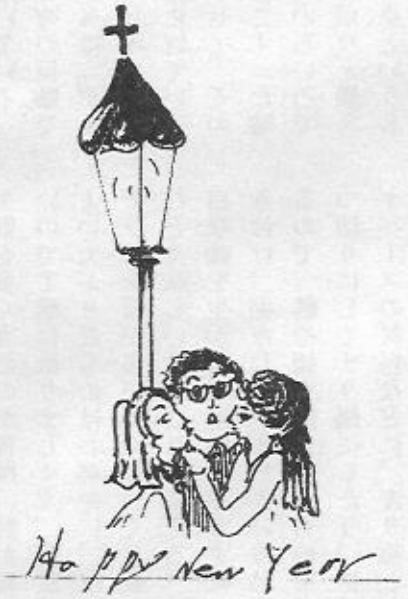
私は、今の商売を始めてまもなく、アメリカで売れば儲かるはずと言う幻想にとらわれて、アメリカに行った。古い着物を解き、京都の西陣で湯のしをしてもらい、それに「良いシルク」と言う意味で「ボンヌ・ソア」というフランス語のラベルをつけたのをダンボール箱に詰め、売りに行った。今から考えたら「何をかいわんや」の思いつきの遊び事なのだが、当時は真剣だった。

最初はロスから始めたが、デザイン関係を廻っても相手にされず、次はサンフランシスコ、そこでも「何考えているの…」といった調子で皆目売れず。挙句の果てに最後の希望の地、ニューヨークに降り立った。金も少なくなり安宿に寝泊りしながら、ブテック、衣料品関係やデザイン関係らしき店などに、飛び込みセールスをするが、まるっきり売れない。金も無くなり飛び込んだ店の女性バイヤーが「あなたにワン・チャンスを与えるわ」と言って全て買ってくれた。値引きはしたが、帰りの荷の航空運賃を考えれば助かった。

明日、ケネディ空港から日本へ発つ夜に、たまたま通りかかったタイムズ・スクエアで私は、カウントダウンを見たのである。多くの騎乗した警官がビルの周りに集まった群集を監視していて、ビルの上には大きな球が見える。何が起こるのかわからずに観ていた。何人ものグループが数えられない群衆となって埋め尽くしている。近くの娘に聞くと「カウントダウン」を見るために、田舎から来たらしい。「何処から来たの」と聞くから、「ジャパン」と答えたが、わからなさそうに「チャイナね」と答えたように思う。髪は金髪、目は濃いブルー、肌は透き通る白さの娘が何人もいた。

本場のアメリカの娘は何んと美しいのかと見惚れた。すっかり有頂天になり、待つこと数時間。ついに秒読みが始まり、大きな球が大きな音と共に割れて中から紙吹雪のようなものが飛び出た。すごい歓声があがる。次の瞬間、近くの若い美人が私にキスの雨を降らしてくれたのである。幾人かが私に抱きつきキスをする。回りの人々も皆同じ様に新年を祝って抱きあっていた。

みんなの興奮が少しおさまってから、私は帰ろうとしたら、隣の娘が「私達、これから祝う会を近くのレストランでするから、独りでは寂しいだろうから来たら」と誘われて行った。彼女達は六人ほどで、遠い田舎から来た様子でとても純朴な感じであった。チキン・バーベキューとワインで乾杯して、これまでのアメリカでの悪戦苦闘も忘れて、アメリカン・ドリームの主人公になったみたいな気分になった。最初で最後のアメリカの思い出である。



深奥幽玄　手談の交わり

囲碁で豊かな人生を！

日本棋院高槻支部

芥川囲碁サロン　㈱八谷商会経営

日本棋院　棋士　　谷村義行八段による

大盤解説　　毎月第二日曜日　　午後２；３０より

指導碁　　毎月第二日曜日　　午後４；００より

高槻市芥川町２－１０－１１（芥川商店街）

ＴＥＬ・ＦＡＸ　072-682-0403（代）